

# 市長の伊賀じまん

## —伊賀を支える鉄道文化—



▶伊賀を走る昭和40年代の蒸気機関車(写真:「古い写真が語る伊賀の風景」より転載)



今年伊賀線が開業100周年を迎えます。市民の身近な交通手段として、また、近頃は着地型観光を進める上での観光客の交通手段として大切な役割を担っています。伊賀線といえば松本零士さんデザインの忍者ラッピング列車が魅力のひとつで、訪れた観光客は写真を撮るなどして楽しんでくれています。

私が初めて伊賀線に乗った頃は木製の車両で、当時の上野市駅の外観の色合いは屋根が濃い赤色、壁は今のように2色に分かれておらず、全面がクリーム色でした。当時と今とでは列車も駅舎もずいぶん変わってきていますが、多くの人にさまざまな思い出を残してきた100年間であったと思います。今後も、このような鉄道や駅舎の魅力をもっと発信するとともに、周辺施設と合わせたにぎわいづくりも進めていきたいと考えています。



▲昭和55年頃の上野市駅

かつて伊賀には、ほかにもさまざまな列車が走っていました。中でも

JR(当時は国鉄)といえば、大阪～東京間を往復した夜行寝台急行『大和』のことが思い出されます。東京に帰る親戚をよく伊賀上野駅へ見送りに行ったものです。また、蒸気機関車といえば、お召し列車が伊賀上野駅を通ったことがありました。見たことのないピカピカのあずき色の美しい車両がスピードを緩めながら駅構内を通り抜けていく光景は、今でも鮮明に覚えています。そんな蒸気機関車が廃止になり、間もなく姿を消すと決まった頃、父親に連れられて蒸気機関車に乗り込み、一緒に名残を惜しんだことが懐かしく思い出されます。

鉄道が通っていないまちが全国に多数ある中で、伊賀市は古くから鉄道に支えられ、外の世界と結びついてきたといえます。そして、鉄道は今や市民の安心感やまちの風格に必要なものとなっています。今一度、鉄道の存在についてしっかりと考え、人々の精神・経済・文化を育んでくれた大きな財産として、これからもずっと大切に残していきたいものです。

(伊賀市長 岡本 栄)

## 近世「伊賀国」の人口

市史編さんだより (40)

私たちの住む伊賀地域には昔は何軒ぐらゐの家があり、人口はどれぐらゐであったのだろうか、と疑問に思ったことはありませんか。今回は江戸時代の伊賀の人口について紹介します。

宝暦年間(1751～64)に藤堂藩の法令や職制などをまとめた『宗国史』には、伊賀国の町村別の人口や家数などが記された「伊賀志」が収められています。これを集計すると、伊賀国の人口は約9万人、家数は約2万1,000軒となります。

そのほか、藩の記録である『庁事類編』の延享元年(1744)の記事からも、江戸時代中期の人口は約9万人であったといえるでしょう。

「伊賀志」が記された頃から遡ると約100年、慶安4(1651)の記録と比較すると、人口が2万1,600人、家数が約4,600軒増えたことがわかります。戦国の世が終わり、平和な時代となった江戸時代前期は、全国的に人口増加の時代でもありました。

「伊賀志」から約120年後、明治5年(1872)の町村別の概要を記録した「伊賀国村明細帳」の人口をまとめると、江戸時代中期と比べてあまり変化しなかったことがわかります。

江戸時代は、飢饉や災害などもありましたが、人口の推移を見ると比較的安定した変化の少ない時代であったといえます。

明治以降、伊賀地域の人口は急速に増え、明治5年(1872)から約120年後の平成2年(1990)の統計書を見ると、人口は約16万6,000人となりました。近代・現代は、江戸時代とは異なり変化の激しい時代であるといえます。

このように、それぞれの時代の特徴はこうした人口の推移からも知ることが出来ます。

【伊賀国の人口推移】

年代	人口(人)	家数(軒)	出典
慶安4年(1651年)	68,374	16,469	『宗国史』
宝暦年間(1751～64年)	89,970	21,081	『宗国史』 「伊賀志」
延享元年(1744年)	93,653	—	『庁事類編』
明治5年(1872年)	93,391	20,540	「伊賀国村明細帳」
平成2年(1990年)	166,685	47,262(世帯数)	『三重県統計書』

総務課市史編さん係  
TEL 52・4380  
FAX 52・4381